
古木の下で

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古木の下で

【Nコード】

N0134L

【作者名】

ひろ

【あらすじ】

大学一のもて男、羽瑠はるを好きになってしまった、友人すら作れない孤独な四季しきは、ある日羽瑠のシンパに絡まれ、その後羽瑠から告白を受けてしまう。

その1（前書き）

恋愛ものですが、BL、いわゆるボーイズラブですので、ご理解いただけない方はご遠慮ください。

その1

僕、姫野ひめの 四季しきが地元を離れて2年がたっていた。

いつもの様に大学までの道を急いで歩く。
朝の喧騒に押し出されながら、ただ前を向いて歩き何時もの繰り返しに溜息が出た。

そうして校門に近い場所に堂々とその姿を孤立させ、まるで人々に己を認識させるかのように立っている銀杏の古木の前に差し掛かった時、やっぱり何時もの声がした。

「おはよう、四季」

声を掛けられ振り向くと、同級の 各務かがみ 羽瑠はるが自転車に跨り行き交う人の視線を独り占めしていた。

「・・・おはよ」

僕の億劫そうな声に気付きもせず、そのまま自転車をおり横を歩く。
「今日も良い天気で良かった」

にこにこ笑いながら横を歩く羽瑠に

「そうだね」

と短く答え歩みを速めた。

同じ性別とは思えないほどに整った顔立ちの、カリスマ性を持った羽瑠は学生の憧れの的だった。

そんな彼を初めて目にしたのは大学の入学式の日、沢山の人が行き交う中ずっと僕の瞳の中に入った彼はあまりにも目立ち、眩しくさえあった。

目で追う事で自分の気持ちに確信めいた物を覚え苦笑を零す。

よもや自分が同姓の、まして大学一の男を好きになるなんて思ってもいなかった。

友人も沢山いて、いつもゼミの中心的存在の羽瑠が、いつも1人で浮いてしまう僕と接点を持ったのは偶然だったはずだ。

その偶然が早くも2年を迎える。たまたま取ったゼミに彼を見つけ

た時、思わず喜んでいた。そしてそんな自分の気持ちに名前を付けられずにいた。

大学に入り初めてのゼミ。

僕は少なからず緊張し広い講堂に入った。

ぐるりと周りを見渡すと、入学から2カ月間に友人関係を築いた同級生が、そこここでスラムを組み嬉々たる声を上げている。

しかし、僕の周りにはぽっかりと穴が開いた様に空席がめだった。昔から、そうだ。

中学の時も、高校の時も、大概1人、というのが多い。決して、1人が良かった訳ではなく頑張って友人関係を築こうとした時期もあった。

しかし、何故か上手くいかず、今に至る。

溜息を吐きながら教材を開いていると、ふと影が僕を覆った。

不思議に思い頭を上げた時、声が降ってくる。

「ここ、開いてる？」

良く通るバリトンの声がし、横の席に誰かが腰を降ろした。

驚いてその人物の顔を見、息が止まる。

それが羽瑠だった。

僕の視線に気が付いた彼が振り返る。

「誰か来る予定だった？」

徐にそう聞かれ、反射的に首を振っていた。

「そう、良かった。あ、俺、各務 羽瑠。あんたは？」

整った顔を笑顔で崩し、そう言った羽瑠から僕は視線を外せないでいた。

あれから約2年。

羽瑠は何かにつけ、僕の前に現れていた。

それは、とっても些細な事から、大きなことまであつて僕の戸惑いは大きい。

近くのアパートに住んでいるらしい彼は、毎朝僕の姿を見つけると、挨拶をし中までの数分と一緒に歩いた。

今日も勿論そうで、足早に歩く僕の隣をゆつくりと歩いていた。そうして、いつもの様に彼のシンパが僕達の周りを囲む。

「今日もお2人で登校か？」

とからかう声は、必然的に僕に向けられ、いたたまれなくなる。何時もはそれだけで済んでいたのに今日は違っていた。

シンパの輪の中から鋭い声が上がる。

「あんた、何なんだよ！」

そこに居た全員が声の主を探す。

シンパの中央ほどにその人は居た。小柄な彼は確か須藤、とかいったか。

鋭い眼差しが僕を射抜く。

「どうしたの、秋葵ちゃん怖い顔して」

シンパの1人の声に彼が更に怒るのがわかった。

秋葵と呼ばれた彼は一歩前に出ると、僕を見据え

「羽溜さんに近づかないでよ！あんたが居ると迷惑なんだよ！！」

明らかな敵意。戸惑いがその場を包んだ。

「・・・え、と、須藤くん・・・だったかな？」

「そうです」

彼は僕の声掛けに瞬時に答える。

「言っている意味が解らないんだけど？」

小柄な彼のかわいい顔が歪んだ。

「はあ?! あんた馬鹿じゃないの?! 今この学校の中に広まってる噂 shouldn't しないの?!」

うわさ??? 何の????

クエスチョンマークが頭の中を踊る。噂、とは何なのか、僕には皆目見当も付かなかった。

「あんたが羽瑠さんの周りに居ると、迷惑なんだよ！」

必死に訴える彼の顔は、最早涙に溢れていた。

泣くなんて・・・卑怯だよ。

僕にはできない芸当だ。そうして其れが示すものが何なのかわかった。

どうやら彼は、羽瑠の事が好きらしい。シンパの中で、どれだけの人が彼の様に羽瑠に本気なのか、解らない。でもけっして少なくともない筈だ。

そんな事をつらつらと思っていた僕に業を煮やしたのか、彼が僕の目の前に来る。そうして小さな腕を振り上げた。

殴られる？！

まあ、それも悪くはないのかもしれない。何故に彼がここまで怒っているのかは分からないけれど、それで気が済むのならばとそう判断し、ぎゅっと目を閉じた。

しかし、しばらく待ってもなんの衝撃もない為、そろりと目を開けると目の前に壁があった。

良く見ると、其れは壁ではなく羽瑠の背部だった。

「秋葵」

静かな、しかし芯から冷え込むような、そんな声がする。須藤の体がビクリと揺れた。

その異様な雰囲気にもわりのシンパがどよめき、空気を一笑するような笑い声があがった。

「秋葵ちゃん、冗談だよな？羽瑠もまじになるなよ・・・」

シンパの声に羽瑠は秋を掴んでいた手を放す。そして、自転車を置き僕の腕を掴み歩き出した。驚きのあまり、声も出せない。そのまま強引に僕は歩かされていた。

強引に連れられ、到着したのは何棟かある講堂の1つだった。そこは普段あまり使わない講堂。ほぼ全ての教室が資料室となつて

いる。

しかし、お金がある学校な為、必要ない所までベンチがあり、飲み物の自動販売機が設置されていた。

窓辺の日当たりが良いベンチに座らせられる。

迫力に負け、大人しく腰をおろした。

「何飲む？」

徐にそう聞かれ

「えっと・・・じゃあカフェオレで・・・」

戸惑いながら答えた僕の手には、カフェオレの缶が落ちてきた。

羽瑠は当然のように横に腰を降ろす。ドキドキしながらも、気付かれないように少し距離をとった。

「・・・悪かったな」

突然そういうと、自分の持っていたコーヒーの缶を開ける。

「何が？」

本当に意味がわからなくて聞き返すと、羽瑠は苦笑を浮かべた。

「いや、秋葵がなんか可笑しな事言って」

ようやくさっきの出来事のことを言っているのだとわかった。

「ああ、さっきの・・・。全然気にしてないよ、絡まれる事なんてしよっちゅうだし」

実際に街を歩いていると、見知らぬ人に声を掛けられたり腕を掴まれたりと絡まれる事は多々あり、秋葵との出来事は些細な事だったのだ。

妙な沈黙が流れる。

沈黙が続いた為見ると、眉間に皺を寄せ、複雑そうな顔をした羽瑠がいた。

「・・・お前・・・良く絡まれるのか？」

低い声が聞いてくる。

僕は戸惑いながらも頷いた。

「なんでもっと早く言わないんだよ！」

急に声を荒げた羽瑠は僕の肩を掴んだ。

「なんでって・・・あなたには関係ないでしょう?!」

負けじと僕も声を荒げる。ぴたっと、羽瑠の動きが止まった。

「関係・・・ない?」

傷ついたような顔をし僕を見詰める。

ああ、やっぱり僕は駄目なんだ・・・。

こんな顔をさせたかったわけじゃ、ない。

友人関係を築く事ができなかった僕に久しぶりにできた友人だったのに・・・。

これで、明日から又1人になると思うと涙が浮んだ。

しかし、その時だった。

ふと、日差しが陰り・・・何かが僕を覆う。

そうして唇に何かが触れた。

目の前に羽瑠のドアップの顔がある。自分の唇に触れたのが羽瑠の其れだと気付いた時には、唇が離れていた。

呆然と、何もない壁を見詰める。

「・・・四季?」

遠慮がちな羽瑠の声が聞こえた。

ゆっくりと頭を動かし羽瑠を見る。

「・・・え、・・・何?」

当然のように答えたけれど、頭の中はパニックだった。

何が起きたのか理解できなくて戸惑う。

今、キスされた??

なんで??

からかわれた・・・のか?

いや、そんな筈はなく、僕の中でなかった事にしてしまえば良いと思った。

そうして羽瑠を見る。其処には、真剣な眼差しの彼がいた。

「四季、なかった事にするなよ」

心を読まれたかのような言葉。

戸惑いが顔に浮んだ。

「お前は何時もそうだよな」

彼の言葉に反発心が頭をもたげる。

「何時もって・・・なに？」

ちよっときつい言葉になってしまったけれど、抑えられなかった。

「そうじゃないのか？俺にはそう見える」

迂回したような言い方。イラっとした。

「言っている意味が解らない。はっきり言ったらどう？」

つつい、喧嘩腰になってしまう。そんな自分に嫌気を感じながら羽瑠を見た。

「何かあっても直ぐになかった事にしてしまう。秋葵の事だってそうだ」

苦い顔で羽瑠は一気に言った。

「秋葵が言ってた噂の事、四季は気にならなかったのか？俺は凄く気になった」

そういえば、さつき須藤がそんな事言っていたような・・・。

「あの噂っていうのはな、俺と四季が付き合っているっていう物なんだよ」

静かな羽瑠の言葉が浸透して来る。言葉が自然に零れた。

「なに、それ」

酷く驚いて、どのように出てきたのか解らない噂に振り回される。

「何、それ、だよな。でも俺は満更でもなかったよ。噂でも良いから、其れをきっかけに四季と付き合えたら、と思った」

耳を疑う、とんでもない告白を今受けている？

自嘲気味に笑う羽瑠を、凝視した。

「それって・・・？」

何かを追うように言葉が出てくる。

「わかんない？・・・俺は四季の事が好きなんだよ」

まるで、何かを確認するように羽瑠は言った。

すき？

「あ、りがとう。・・・僕も羽瑠の事、友達として好きだよ」

履き違えるなと自分に言い聞かせ、嬉しい誤解をしない様に、探る様に言葉を紡ぐ。

「そ、か……。だよな。普通、そうだよな。ごめん、なかった事にして……」

悲しそうな顔をしそう告げると、羽瑠は立ち上がりその場を後にした。

その1（後書き）

稚拙な文でしたが、最後まで読んでくださりありがとうございます
> m (——) m <

なにぶん趣味で執筆していますので、ご容赦いただけたらと思います。
す。

次回も読んで下さると幸いです・・・。

その2

生活が一変した。

やっぱり、いつもの様に大学までの道を歩く。

朝の喧騒を後ろに確認しながら、あの銀杏の古木の前に差し掛かった時、僕の歩みが止まった。そうして後方を確認するけれどあの声は聞こえない。

息が詰まるような言葉を残し、羽瑠は僕の前から消えた。

あれから、1週間。

毎日の行事のような朝の出来事が途絶えていた。

講堂のあちこちで、シンパの連中は目にするけれど、彼の姿は見つからない。

何がいけなかったのか・・・。

意味が解らないキスと、悲しそうな顔を残し彼は消えた。

実際には 消えた と言うのは語弊があり、この大学内にはいるのだろうけれど、僕の居る空間には入り込まなかった。

やっぱり、こうなるのか、と溜息を吐きつつ再び歩みを進める。

何時もの事じゃないか、と自分に言い聞かせる。以前に戻っただけ・・・。

平穏な、静かな日々に戻って良かったじゃないか。

わかっているけれど、2年という期間はあまりにも長すぎた。もうすっかりと、羽瑠がいる毎日が当たり前になっていて・・・、ぽっかりと空いた穴にピューピューと風が吹き荒れていた。そうして、孤独感が僕を襲う。彼のおかげで、色のついた世界を見せてもらっていたのに、今はモノクロだった。

「姫野」

意識を現実へと誘う声がする。

声の主を探すと、須藤ともう1人。確か、木崎、といったか。羽瑠の親友の1人だった。

「・・・はい？」

彼に話しかけられた事はなかった為、不審に思いながら答える。
木崎はにこりと笑い

「悪いんだけど、これ、あいつに持って行ってくれないか？」

そういうと、なにやら封筒を僕に差し出す。

「・・・あいつって？」

「羽瑠」

どきりとした。横にうつむいていた須藤も顔を上げる。

「雪都さん？」

須藤の戸惑う声がする。それは僕も同じで、木崎を凝視した。

「あいつ、今熱出して休んでるんだ」

そうだったのか、だから姿を見かけないのか・・・。

ふと、納得するけれど、そここれとは別で。

「なんで、僕に・・・？木崎さんが持つていけば」

「あいつが熱出したのつてあんたのせいだろ？」

僕の言葉を遮りとんでもない事を言う。

「は？」

言葉が続かない。

「あの日から、あいつ熱出したんだよ」

あの日、を妙に強調し木崎は言う。あの日、とは、あの日、の事だ
ろうか・・・。

「兎に角、頼んだから」

木崎はそう言つと、僕に強引に封筒を渡し須藤の腕を掴んで歩き出
してしまふ。

「つつちよ、僕は家も知らない」

「其処に住所書いてあるから」

そう、言い放ち、木崎は建物の中へと消えた。

呆然と渡された封筒を見る。

確かに表に、ここからそう遠くない住所が殴り書きの様に記してあ
る。

なかった事、には出来ないのか。
どうせたいした物ではないと思う。

しかし、大学の名前が入った封筒なわけで……。
「ああ~~~~っ、……しかたないか……」

僕はくるりと踵を返した。

そこは、こちら辺では珍しく緑が沢山ある一角だった。

一軒の綺麗なマンションが見える。

「あ、れかな？」

呟いて近づく。

住所を確認し、エントランスにある数字が記されている基盤に、羽瑠が住んでいるであろう部屋番号を押し待った。

しばらくすると、ガチャ、と音がしスピーカーからくぐもった声が聞こえた。

『……はい』

掠れた声。

ぎゅっと胸が痛んだ。

『どちら様ですか？』

不審そうな声が再度掛けられる。

僕は慌てて、スピーカーに答えた。

「姫野です」

ガタン、と何かを落とす音が響く。そうして直ぐに慌てた様な声が聞こえた。

『し、四季?!』

なぜだか、その声が全てを語っている気がして笑み零れた。

「羽瑠? 凄い声だね、大丈夫?」

くすくすと笑いスピーカーに話掛けると

『ちよっ、今開ける』

声とほぼ同時に重そうなガラスの扉が、音もなく開いた。

歩を進め、羽瑠の部屋がある8階をエレベーターで向かう。

8階に付きエレベーターが開くと、その階のエントランスに羽瑠がいた。

咳をし、ガウンを纏った彼は僕を見つけると駈けるようにし近づく。
「どうしたんだ？！まだ、授業がある時間だよな？？」

掠れた声でまくしたてるように言う彼に、僕は苦笑した。

「出てこなくても良いのに。兎に角、更に悪くなると困るから家に入ろう？」

僕の言葉に状況が掴めていない彼は、首をかしげながらそれでも僕を招き入れてくれた。

其処は、その階でも1番日当りの良いであろう、角部屋だった。

広々としたダイニングが僕を出迎える。

「1人？」

僕の問いかけに彼は苦笑する。

「もう、5年は1人で住んでるかな？親は海外」

そうだったのか、と思う。

そして、ここに來た理由を思い出した。

「ああ、そうだ」

これ、と封筒を差し出す。羽瑠は首を傾げながらそれを受け取ると中身を確認した。

「あ、のやるゝゝ・・・！」

掠れた声でそう吐き出すと、中身をぐしゃりと握り潰した。

「ちよっ！・・・いいの？」

驚いて問いかければ、羽瑠は困った顔をする。

「？」

「これ、雪都からだろ」

質問に領けば、彼は頭を抱えしゃがみこんでしまった。

「あいつ、なんか、四季に言ってた？」

その質問に少し考え苦笑を浮かべる。

「ああ、・・・なんか、羽瑠が熱出したのは僕のせいだとかなんと

か・・・」

それを聞いて羽瑠はぎよっとする。そうしてもう一度、あのやろ・・・と呟いた。

「？なんだか良く分からないけど、用は済んだから帰るよ」

そう告げ、玄関へ向かおうとする僕に、羽瑠は握り潰した紙を差し出した。

不思議に思いながらそれを受け取り中身を見る。

文面を見、絶句した。

『羽瑠へ

馬鹿じゃねーの？

姬ちゃん、又1人だぜ？

お前の告白、ちゃんと、しっかり伝わってないんじゃないかね？
さつさとものにしまえ。

こっちがいい迷惑だ。

じゃあな

雪都

』

“ 姬ちゃん ” とは、もしかして僕の事？？

確かめるように羽瑠を見る。

彼はフロアリングに座り込んだまま、僕に頷いていた。
かぁーっと顔が熱くなる。

告白って・・・

うおほん！と羽瑠が咳払いをする。

そうして、突っ立っている僕の手を、そっと掴んだ。

「まあ、そういう事だ」

その言葉と同時にぐいと引っ張られる。バランスを崩した僕はそのまま羽瑠の腕の中に収まってしまう。

「ちょ、羽瑠？！」

「四季、俺は、お前の事が、好きだ。・・・愛してる」

身じろいだ僕を抑え込むようにぎゅっと抱きしめ、囁くように告げた。

体の先まで熱くなるのがわかる。

僕は何か言おうとするけれど、うまく声に出来ず口をパクパクとさせる事しかできない。

羽瑠の顔が近付き2度目のキスをされた。

そのままゆっくりとフローリングに押し倒される。

羽瑠の唇が僕の首筋を這い、その手が服の中に入ってくる。ぞくりと甘い疼きが背中に走った。

「ちよっ、は、る！」

悪戯な手がボトムの中まで入って来て、僕の物をやんわりと揉み始めると、本格的に焦った。

「は、・・・や、だ!!」

これは本当にやばいと思い、渾身の力を足に込める。と、羽瑠は声にならない悲鳴をあげた。どうやら、僕の右膝が羽瑠の腹部に命中したようだ。

冗談ではない。勝手に告白して僕の返事を聞かないなんて、あり得ない。

そんな状況で抱かれてたまるか!!、と思った。

羽瑠の下から這い出、乱れた衣服を整える。

「し、き？」

苦しそうに呻きながら羽瑠が起き上がると、僕はキッと彼を睨んだ。

「・・・あ、ごめん。なんか、暴走しちゃって・・・」

今にも泣きそうな顔をした羽瑠が其処いた。

「いや、だよな。ほんとにごめん。・・・帰っていいよ」

まるで自己完結してしまったかのような言葉に、むかつく。如何やら短気であつたらしい僕は、羽瑠の胸倉を掴み、グイッと顔を近づけた。

「勝手に自己完結してんじゃないよ」

驚く程の低音に、羽瑠が目を開く。

「勝手に告白して、はい、終わりなわけ?!」

ドスの効いた僕の声に言葉もない。ただ、じっと僕を見つめていた。
「僕の返事はあんた、いらないのかよ」

声のトーンを少し上げ問いかけるように告げる。何かに弾かれた様に羽瑠は頭を振った。

につこりと笑い、羽瑠の胸倉を掴んでいた手を離す。すかさず羽瑠は居住まいを正し、僕に向き合った。

「そ、うだよな、返事・・・聞かせて、もらえるか?」
おずおず、といった感じで聞いて来る。

しかし、僕は真顔のまま、告げた。

「その前に」

羽瑠がごくりと息を飲み込むのがわる。

「ベッドに戻って」

こくこくと頷き、直ぐ行動に移す羽瑠を見て、もう怒れないな、と思った。彼の後に続き寝室に入る。羽瑠が大人しくベッドに入るのを確認し、端に腰かけた。

そうして深呼吸をする。

「・・・僕も、羽瑠の事、好きだよ。友達じゃなくて・・・愛してる」

そう告げ、大人しくしている羽瑠に口づけた。羽瑠の腕が僕を包む。その温かい感覚にうつとりした。

「じゃ、じゃあ、続き・・・良い?」

いやらしい顔をし告げた羽瑠に、しかし僕は舌を出した。

「だゝめ」

「どうして!?!」

起き上がった羽瑠は切羽詰まった様に言う。僕は再び彼をベッドに押し込み

「僕のせいで、なんて言われたくない」

雪都の言葉を拝借した。

羽瑠の顔が困ったように曇る。しかし、何かを思い付いたらしくに

こりと笑い

「治ったら、良い？」

僕の手を握り嬉しそうに告げた。

体中が熱くなるのがわかって、僕はそっぽを向く。羽瑠の手が僕の手を強く握る。

「なあ、だめ？」

その、甘ったるい声に、僕はそっぽを向きながら、小さく頷いた。

いつものように大学までの道を歩く。

朝の喧騒を背後に確認しながら歩く。

そうして、いつもの銀杏の古木の前に差し掛かると、背後から声がした。

「四季！」

聞きなれたバリトンの声。

声の主は跨っていた自転車を降り、僕の横に付いた。

「おはよう、羽瑠」

僕がニコリと笑い告げると、羽瑠も嬉しそうに笑う。

そのまま、大学までの道を歩いた。

今、この大学では可笑しな噂が流れている。

各務 羽瑠 は、姫野 四季 の犬になったらいい。という物。

どうやら、毎朝の光景を見た人間が流した噂らしい。

僕はくすりと笑い、犬と呼ばれている学校一の男を見た。

「ん？なに？」

僕の視線に気づいた羽瑠が聞いて来る。

「別に、なんでもないよ？」

どうやら、本人もこの噂を知っているようだが、気にする素振りもなく、逆に『言わせておけばいい』との事だ。

相変わらずシンパも沢山いるけれど、僕を大切にしてくれる。

今、僕はとっても幸せで、ちょっと怖いくらいだ。
その幸せを、手放さないように頑張ろうと、思っている。

おまけに続く・・・

その2（後書き）

稚拙な文面で申し訳ありません>m(_____)m<

なにぶん趣味で執筆していますのでご容赦ください。

本編はこれで終了ですが、おまけとして羽瑠の話があります。

そちらも読んで頂ければ幸いです・・・

羽瑠の眩き

三羽瑠の眩き

三

「ん・・・」

腕の中で、甘い吐息を吐きながら身じろぐ姿に目が醒める。

ゆつくりと覚醒する意識の中、腕の中の愛しい姿を確認した。

今日は土曜日で、俺も愛しいこいつも講義はなく、昨晚から甘い一時を楽しんでいた。

今でも信じられない。こいつが、四季が俺の恋人になってくれるなんて・・・。

2年間、それなりにモーションを掛けていたつもりだけれど、にぶちんの四季は一向に気づかなかつたらしい。

出会ったのは、初めてのゼミ。

講堂の中、1人で座っていた四季を確認した時、息が止まるかと思つた。

色素の薄い肌と髪、目鼻立ちもすっきりとしていて、周りにいる同級達も遠巻きに四季を見つめている。

1輪の花。まさにそんな感じで、凜とした佇まいなのに何処か可憐なその容姿に息を飲んだ。

そうして俺は四季の虜になってしまった。

彼が通学してくる時間を見計らい、声を掛ける。

四季は不審ながらも必ず挨拶を返してくれた。

そうして観察をしていた時、ある事に気付いたのだ。四季が何時も1人でいる事を。

1輪の花、という例えはどうやら大袈裟ではなくて、その容姿故に

他人を遠ざけてしまいうらしい。それから、この天然でとんちんかな性格も災いしている。

明らかに四季狙いで話しかけている奴もそれなりにいたが、やっぱりにぶちゃんが災いしているらしく、相手の気持ちに気づいていない様子だった。

ある昼時だった。

四季を観察しだして3カ月がたっていたと思う。

相変わらず1人でいる四季に一学年上の先輩、もう名前など忘れてしまったがその人が声を掛け、四季を連れ出している所を発見したのだ。あまりにも不審な姿に、後についていったのだ。

人通りの少ない学園の裏通りに2人はいた。

先輩が何かを言っているが四季の反応が無い。尚更不審に思い近付いてみると、どうやら先輩は凄く、それは物凄く怒っていたのだ。

「お前、いい加減にしろよ?!」

そんな言葉に、自分が言われている訳でもないのに驚いてしまう。

「なんとか言えよ!」

更に続けられた言葉に、四季は眉を顰めた。

「・・・あなたの言っている意味が解らないのですが」

眉は顰められたまま、憮然と告げた言葉に先輩は更に声を荒げる。

「俺と付き合ってくれて言ってるだろ?!」

・・・それ、怒鳴って言う言葉??

初めにそう思ってしまった。先輩は俺の方に背中を向けていた為その表情は見えないけれど、きっと真っ赤になりながらの言葉だったのだと思う。

しかし四季はやっぱり眉を顰めたまま、言い放ったのだ。

「ですから、僕は何処にも行きません。行きたい所があるのならお1人でどうぞ」

明らかに的外れな答え。後ろ姿にも関わらず、先輩が怒りに震えているのがわかった。

その手が拳を握るのが解り、ああ、これはやばいな、と思ったのと体が動いたのはほぼ同時で……。

「四季！」

俺の声に驚いた先輩は一目散にその場を後にしたのだった。

急に目の前に現れた俺と、消えた先輩に驚いた四季だったけれど、一つ呼吸をし

「……なに？各務くん」

当たり前のように返事をしたのだった。

その時俺は決意したのだ。この天然で危なっかしい四季を1人にしてはいけない。何があっても守るのだ、と。

あれから早2年。

何の進展もないまま過ごしていたけれど、四季の態度があまりにも何も無く、心配するのも迷惑だとあの日に言われた気がして、にぶちんだと知っていたのに伝わらない告白をしてしまったのだ。

即、ダメだとわかる反応で俺は逃げてしまった。1人で落ち込んで考え過ぎた結果熱を出し……もう駄目だと思っていたけれど、その後の展開は本編に書いてあるとおりで……。

可憐な容姿とはかけ離れている性格の持ち主で、兎に角にぶちんな四季。

そんな四季が今、俺の腕の中で無防備な姿を晒してくれている。信頼と、愛情。

両方を感じ、俺は1人でやりとした。

「は、る？」

いつの間にか、うつすらと目を開けて俺を見つめる姿があった。

「ああ、ごめん、起こした？」

そう言い形の良いその唇にキスを落とす。四季は戸惑いながらもその口づけに応えた。

「……ん……」

甘い吐息を吐く四季を目の当たりにし、もったまらない。

静かに覆い被さると、軽く押し返された。

「そ、そうだ、羽瑠」

困ったような顔で反らそうとする。そんな四季もたまらなくて誤魔化されてやる事にした。

「ん？何？」

そう尋ねると、顔を赤らめながら俺を見た。

「あの、ずっと聞こうと思ってたんだけど・・・」

言いよどむ四季を辛抱強く待つ。

「・・・須藤くん、って、羽瑠の、何？」

その質問に絶句する。ずっと視線を反らす四季に苦笑を覚えた。

「何って、どういう事？」

笑いを含んだ言葉に、眉間に皺を寄せながらも何かを思案しているような顔で俺を見る。

「あの日・・・彼が僕に向けた刃は明らかに敵意で、羽瑠の事、好きなんだなあ〜っていうのはわかったんだけど・・・」

ああ、そうとつたか、と苦笑が零れた。確かに秋葵の態度は誤解を招く要素がふんだんに鑲められていた気はする。しかし、それはまあ、なんだ・・・。

「秋葵は、幼馴染なんだよ。可愛い弟分みたいなもんで、四季が思っているような感情はあいつにはないよ」

まだじと〜とした視線を投げかける四季に笑顔を向けた。

「俺は、これっぽっちも秋葵にやましい感情は、ない・・・あいつはまあ、木崎・・・」

「え？何？？」

語尾の消え入りそうな言葉に四季はクエスチョンマークを浮かべる。人の恋路に興味はない、これは又別の物語ってことで、だから、笑顔を浮かべ誤魔化す事にした。

「そんな事より・・・」

さつき誤魔化された事、と耳打ちし、そうすると四季は首まで真っ赤になりうつむく。

そんな反応も可愛く、愛おしく、再び四季に覆いかぶさった。

俺が大学でどんな噂をされているかは、勿論知っている。

犬？

結構じゃないか。

俺としては、まあ、番犬つてところかな？

自分の魅力に皆目思い至らない、愛しい恋人を守っていく、そんな番犬。

そんな事を思いながら、綺麗な桃色に変化した恋人の肌を堪能した。

END

羽瑠の眩き（後書き）

羽瑠の眩き、いががでしたでしょうか？

やっぱり稚拙な文です。

すみません > m (—) m <

羽瑠と四季の物語はこれで終了ですが、本編でちらりと姿を現した秋葵ちゃんの話

が続きます。

そちらも是非読んで頂ければ幸いです・・・

STORY ONE

ガタガタつと音がする。

何だ？と思うけれど、ここは東京、隣近所の事は触れないにこした事はない。

しかし、やはり気になる為そつと耳を澄ました。

と、突然家の玄関前に何かがぶつかると音がし、飛び上がってしまう。息を潜めて外の様子を窺うと、くぐもった声がした。

「いつてえゝゝゝゝ」

ハスキーな声。妙に気になり、更に様子を伺った。

「畜生ゝゝゝゝ、勤労学生なんだからしかたねえだろよ！」

ハスキーな声が、誰とも解らない文句を言っていた。

どうする、僕？！

そんな思いが頭を擡げた。

どうするもこうするもゝゝゝ

ああゝ！！

僕は昔からお節介なのだ。

子供の頃から、人のいざこざに首を突っ込み、良く幼馴染のお兄ちゃんに怒られていた。

でも、染み込んでしまった性格はそうそう変えられる訳もなく今に至る。

腹を決め、そつと扉を開こうとするけれど

「あ、あれ？」

ドアノブを捻り力いっぱい押しても開けられない。なんだ？と思い再度押すと

「ん？」

外の声がし、ガタンと扉が開いた。

勢いで体まで外に出してしまう。バランスを崩してしまった僕はそのまま転びそうになり

「あわわわわ〜！」

しかし、衝撃の代わりに何か大きな物に抱きかかえられていた。

「大丈夫か？」

驚きの籠ったハスキーな声が頭上からする。慌てて体制を直し、声の主を見た。

すらりと伸びた手足、180はあるであろう長身に、小さな顔があり、切れ長の涼やかな目が僕を捉える。幼馴染には負けるが、かなりのイケメンだった。

「あ、ありがとうございます・・・ってちがう！！あんた人の部屋の前でうるさいんだよ！！」

恥ずかしさと、苛立ちで大きな声になってしまう。

切れ長な目がぱちくりとし・・・

「・・・俺家がなくなっちゃってさ」

何故だかにこりと笑い

「しばらく泊めて？」

これが、僕、須藤^{すいとう} 秋葵^{あき}と 木崎^{きさき} 雪都^{ゆきと}の奇妙な同居生活の始まり

だった。

ぴぴぴ、ぴぴぴ・・・と電子音がする。

朝を知らせる僕の目覚ましだ。

まだ眠い眼をこすり、カーテンを開けると明るいい日差しが襲う。

そうして、隣の部屋からも、やっぱり電子音が聞こえてくる。雪都のアラームだ。

なかなか止まらないアラームに溜息をつきつつ部屋を出る。

そうして隣の部屋の扉をノックした。

「雪都さん、朝ですよ。雪都さん！」

いくら声を掛けても返事はない。これも何時もの事で、又溜息が出た。

奇妙な同居生活が始まり早くも1年が経とうとしている。

同居人の雪都は一向に新しい物件を探す事なく、居座り続けた。
季節は冬。

寒い朝だった。

低血圧らしく、朝はめっぽう弱い雪都を起こすのも僕の日課になっている。

・・・まあ、同じ大学に通っている、1つ年上の彼を無碍にもできず、頼まれてもいないのに起こしてしまうのは、昔からのお節介な性格が災いしているのだが・・・。

なかなか起きてこない雪都に業を煮やし、扉を勢い良く開けると彼はまだ真夜中だった。

気持ち良さそうな寝息を立て、布団を抱きしめるように眠っている。起きる気配はなく、仕方なく近づき肩を叩こうとした、その時だった。

によつと伸びた腕が、僕の腕を掴みそのまま・・・

「わあ!!」

ぐいつと引つ張られ、ストンと雪都の腕の中に。

え?・・・ちよ、なに??

何が起きたのか理解できずにそのまま、固まる。

ぎゅゅと抱きしめられ困惑した。

体がかーつと熱くなるのが解る。真近に雪都の整った顔があった。

あ、睫毛が長い・・・そんな事を思いながら、体を擦ろうとしたが雪都の顔が更に近づき・・・

「っん?!」

自分の口に何かが触れたと思うと、口腔内を犯される。

そのまま、視界がぐらりと揺れ、いつの間にか雪都の下に自分がいた。

何が起こったのか理解できず、犯されている口腔内がじつとりと快楽を運び抵抗も出来なくなった頃、ようやく口腔を解放され・・・

「おはよ、秋葵ちゃん」

ねつとりと耳をくすぐるハスキーボイスが聞こえた。

その瞬間僕の右手が上がり、パン！と乾いた音が響いた。

「……てえ……」

雪都の呻き声を聞きながら、どうにかその腕の中から這い出る。ふざけるな！と、まだドキドキしている鼓動を誤魔化しながら乱れた衣服を整え、ギツと雪都を睨み見た。

「朝から、彼女と間違えないで下さい。……いい迷惑です」

表情を消し、静かにそう告げると逃げるように雪都の部屋を後にした。

ハスキーボイスが 秋葵ちゃん と背後から聞こえる。それを振り切るように、家を後にした。

人より小さい僕だけれど、歩幅を大きく取り歩く。

子供の頃から幼い顔立ちのせいか、妙に可愛がられるけれどあまりいい気はしなかった。

そんな僕を人並みに扱ってくれたのが、近所に住んでいた一つ年上のお兄ちゃん、各務 羽瑠 だった。

羽瑠の事が大好きで、彼のそばにいたくてこの大学に進んだ僕は、毎日彼の姿を探す。

構内に入り、直ぐに彼を見つけた。沢山のシンパが彼の、……いや、彼らの周りを囲む。

羽瑠の横には不機嫌そうな顔をした、妙に綺麗な顔立ちの男がいたのだ。

彼の名前は 姫野 四季。

どうやら羽瑠のお気に入りらしい。

いつも僕がいた羽瑠の横は、今彼の物になっていい気はしない。だから僕は彼が嫌いだった。

つかつかと、人の塊に近づきシンパどもを押しつけるように羽瑠に近づく。

「羽瑠さん！！」

声を大にして呼びかけた。

シンパどもも僕には道を譲ってくれる。そうして四季とは反対側の羽瑠の横に着いた。

「おはよ、秋葵」

羽瑠の低い声が耳に心地良い。

「あれ？・・・雪都は？」

今一番聞きたくないはずの名前にどきりとした。

そうしてさっきの口付けを詳細まで思い出してしまふ。

僕は赤くなってしまった顔を隠すように下を向いた。その頭に大きな手が乗っかる。

「どうした？何時も一緒なのに」

そんな些細な事でも特別な気がして僕は急いで顔を上げた。

「何時も一緒なんて、そんな事ないよ！たまたま・・・」

その時だった。

次の言葉を紡ごうとした僕の声に被さる様にハスキーボイスが木霊する。

「秋葵ちゃん！俺を置いていくなんて薄情だよ」

間延びした雪都の声だった。

「雪都、おはよ」

羽瑠の声に雪都は笑顔を向ける。何故だかその行為にずきりと胸が痛んだ。

なんだ？これ？

自問自答しつつ雪都を睨む。

「薄情だあゝ？失礼な！！」

僕はそう捨て台詞を吐きながら、人だかりから離れた。

バイトを終え、帰路に着く。

本屋のバイトは案外に肉体労働でかなり疲れているけれど、夕食を作らなきゃいけないくて、自宅の近くにあるスーパーに立ち寄った。

雪都は今までどうやって1人暮らしをしてきたのかわからない位家事全般が出来ない。

まあ、もてる雪都の事だから、女にやらせていたに違いないのだが・・・。

だから同居生活を始めてから、家事は必然的に僕の仕事になっていた。

今日は朝からある意味凄く疲れてしまったから、簡単な物にする。

食材を籠の中にほうり投げながらレジに向かった。

食材の入ったエコバッグは妙に重い。

ずっしりと肩に荷物が食い込んだ。

疲れた体を引きずりながら、なんとか部屋の前まで辿り着く。そうして家の鍵を開けた。

シーンと静かな部屋。

何時もならもう帰っていてリビングのソファにだれているはずの雪都の姿が見当たらない。

あれ？っと思い、彼の部屋をノックしたが返答はなかった。

なんだ、出かけてるのか・・・

妙な脱力感に、はっとなりながら、

「さて、作るか」

なんて独り言で誤魔化し作業に取り掛かった。

食材をエコバッグから出し、リビングの机に並べる。そうして、順番に食材を刻んだ。

今日は冷ご飯が結構あるから五目チャーハンにする。

手際良く食材を炒め、仕上げに水溶き片栗粉を投入するとあつと言う間にとろみが付き始めに炒めておいたチャーハンに掛けた。

香ばしい香りが僕の鼻空を攪る。

ぐーっとお腹が悲鳴を上げた。

今すぐにでも食べてしまいたい欲求をぐっと堪えて、出来上がった2人分の夕食にラップをする。

そうして玄関を盗み見た。

しかし、雪都が帰ってくる気配はない。

しかたなくリビングのソファーに腰掛け、読みかけの単行本を手にとった。直ぐに本の世界にのめり込み文字を追っていく。

あつという間に読み終わってしまった。そうして時計を確認し、驚いた。

もう日付が変わっている。

雪都は？と思い玄関を仰ぎ見るけれど、帰って来た形跡はない。

一応、と思い彼の部屋をノックし、やはり帰っていない事を認識する。

携帯を開いて見ても、彼からの着信はなかった。

何故だかとても悲しくなあって涙が浮んだけれど、零れる前に拭う。そうして冷めてしまった五目チャーハンを無言で平らげた。美味しいはずのチャーハンが、しかし何の味もしなかった。

朝になり、何時もの時間に目が醒める。

隣の部屋からはけたたましいアラームの音がしていた。

帰って来たんだ・・・

そう思うけれど、リビングに出、昨晚作ったチャーハンがそのまま机に置かれているのを発見した時、誤魔化したはずの涙が零れた。ぼろぼろと頬を伝う涙に自分の気持ちを認識する。

ただの同居人ならば、わざわざ食事など作らなくいい。

アラームが聞こえたからといって起こす必要もない。

寝ぼけてキスされてもうろたえる事もない。

つまりこれは 恋 なのだ。

自覚してしまえばもうどうしようもない。

ただ、雪都に逢いたくなくて、急いで家を出た。

いつもより随分と早い登校になってしまったけれど、しかたがない。ほとんど人気の無い構内を歩き、やっぱり人気の無い中庭に辿り着いた。

何時もは無駄に噴水が湧き出ており、学生で賑わっているはずの
庭。

ぐるりと周りを垣根の様に囲う木は桜だ。

春になれば薄い桃色の花が咲き乱れ、学生が集う。

僕はその中でも一際見事な姿を見せる桜の木の下に腰を降ろした。

2月の風は肌を刺す様な寒さで、しかし、煮えきった僕の頭にはち
ようど良い。

溜息を吐きながら、仕方なく読みかけの単行本を広げた。

STORY TWO

家に帰りたくない。

なんとか今日一日を、彼に会わずに過ごしたけれど、今僕たちは同居しておりとどのつまり、家には彼が居るのだ。逢いたくない。

自分の惨めな想いに左右されるのは悔しかった。ので、家には向かわずに歩く。同級の人間に泊めて欲しいと頼んでみたけれどことごとく断られた。

みんな薄情だ！！

そんな自分勝手な事を思いながら、仕方なく羽瑠の家に向かう。こんな事で、幼馴染の彼を煩わせたくないけれど、背に腹は換えられない。

深呼吸し、羽瑠のマンションのインターホンを押した。オートロック形式な為、ロビーでインターホンの返事を待つと、機械音と共にバリトンの声が聞こえた。

『はい』

短い返答に安堵の溜息が出る。

「羽瑠さん？秋葵だけど・・・」

僕の言葉に、羽瑠は驚きながらもオートロックの鍵を開けてくれた。エレベーターで、彼の部屋まで向かう。部屋のインターホンを押すと直ぐに扉が開かれた。

「秋葵、どうした？珍しいな」

笑顔で出迎えてくれた幼馴染に、涙腺が緩む。ぼろりと零れた涙に、羽瑠が驚愕するのが伝わってきた。しかいゝ回緩んでしまった涙腺をそう簡単に引き締める事は出来ずに、僕は羽瑠の大きな胸に泣き崩れた。

どの位そうしていたか、ふと気付くと、僕達は玄関の中にいて羽瑠の大きな手が、僕をあやすように背中を摩ってくれる。

大きく深呼吸し羽瑠の腕の中から出た。

「落ち着いたか？」

全てを包み込むような優しい顔をして羽瑠が問いかける。

僕は頷き答えた。

「・・・ごめんね、羽瑠兄」

学校では使わない呼び名。羽瑠は、気にするなと言い僕を家の中に招き入れた。

ソファーに座った僕に温かいミルクを渡してくれる。羽瑠も向かいのソファーに腰を降ろした。

「で？・・・どうした、何があった？」

静かにそう問われ、固まる。何をどう話したら良いか解らずに僕は下を向いた。

「・・・雪都となんかあった？」

的を得た言葉にばつと顔を上げる。想いの丈をぶつけてしまいたい衝動に駆られるけれど、まさか男の雪都に恋をしてしまいました、なんて言える訳もなくて、途方にくれる。

「・・・別に、ただ家に・・・そう！ゴキブリが出たから、帰りたくないんだよ」

我ながら、なんてちんけな嘘を、と思いながらも、悟ってくれるなと羽瑠を見た。そこには険しい顔の羽瑠がいる。

「・・・言いたくないなら構わんが」

溜息と共に羽瑠はそう告げ、徐に携帯を取り出した。

「悪い、ちよつと良いか？」

携帯を軽く僕に見せながら席を立つ。僕はこくこくと頷き、ホットミルクに口をつけた。

我ながら恥ずかしい所を見せてしまったと後悔したけれど、羽瑠は特に何も言わず、勿論帰れとも言われていない為、今日は何がなんでもここにいろぞと決めた僕。物思いに耽っていると、羽瑠が帰ってきた。妙ににこにことしているなあ、と思ったけれど突っ込まずにおく。

「今日これから四季が来るけど、構わないよな？」

徐にそう聞かれ、訝しげに首を傾げるも、駄目とは言えない。曖昧に頷き対応した。

「ゼミの課題があるんだ。悪いな」

その後は他愛も無い昔話をし、僕は徐々に寛ぎ始めていた。そんな時だった。羽瑠の部屋の中に呼び鈴が響く。

「お、早いな」

そう言い羽瑠はインターホンを上げる事無く鍵を開けた。

「確認しなくていいの？」

僕の疑問に、いいの、と短く告げ玄関に向かう。腕時計を確認しふと顔を上げた時、今度は違うチャイムの音が響いた。

「来た来た」

妙に嬉しそうな羽瑠。じらすように玄関を開けないでいると、今度はけたたましい音で玄関を叩く音がした。あの四季がこんな事をするかな、と疑問に思い玄関を覗き見る。

「はいはい」

くつくつと笑いながら羽瑠が玄関を開けた瞬間、大柄な男が飛び込んで来た。

「羽瑠、てめえ……」

ドスの効いたハスキーボイス。今にも羽瑠に殴りかかりそうな勢いの彼が、視線をずらしあっけにとられている僕を見つけた。

「秋葵……」

ほっとしているような、怒っているような声音でそう呼ばれ、ビクリとする。初めて呼び捨てにされた。そんなどうでも良いような事を思いながらソファから立ち上がった僕に雪都は駆け寄るように向かって来た。そのままの勢いで僕の両肩を掴む。

「無事か？！何もされてないか？！」

意味の解らない質問に首を傾げる。

「な、に言つての？雪都さん」

僕の言葉に、ほっと息を吐き僕の肩を抱くようにすると羽瑠に向けて

「連れて帰るぞ」

そう告げ、僕には有無も言わずそのまま羽瑠の家を後にした。玄関を出る瞬間羽瑠の顔を仰ぐと、くつくつとまだ笑っており、その手を軽く上げ、僕達を送り出した。

今日は絶対に帰るまい、と思っていた我が家のソファーに僕は座っている。

横には怖い顔をした雪都が座っていた。

何故だか居心地の悪い思いをしつつ雪都を見る。そんな僕の視線に気付いた彼は僕の方を向いた。絡み合う視線に顔が熱くなるのが解り、いたたまれなくなつた僕は急いで立ち上がった。

「そ、そうだ、雪都さん、お腹空きませんか？夕食まだですよ、僕作ります」

早口にそう告げ歩きだそうとした僕の手首を何かが掴んだ。其れが雪都の手だと解ると、そこがまるで心臓のように波打つ。

「秋葵ちゃん、なんで今日俺の事起こしてくれなかつたの？」

静かなハスキーボイスが、しかしまるで詰問しているかのように響いた。

何をどう答えれば良いのか解らずに、振り向く事も出来ずにその場に固まる。しばしの沈黙の後、僕の体が凄いい勢いで引っ張られ、そのまま雪都の腕の中に包まれた。

「大学で秋葵ちゃん探しても見つかんなくて、羽瑠から電話があつて心臓止まるかと思つた」

苦しそうな雪都の声。羽瑠が電話したのは雪都だったのか、とぼんやり思う。

「羽瑠が秋葵ちゃん食つちまうぞ、なんて恐ろしい事言うから居ても経つても居られなくて・・・」

「え？」

聞こえてきた言葉に驚き、顔を上げると、いつもおちゃらけている

雪都の顔が真顔にと変わっていた。

「秋葵ちゃん・・・俺、お前の事好きなんだ。誰にも触らせたくない」

とんでもない言葉に視界が歪む。

「秋葵ちゃん、聞いてる？」

返事も出来ないでいる僕に、心配そうな顔をし雪都が声を掛けた。

「え、あ？・・・僕の事、が好き？・・・嘘ばかり!!」

信じられなくて声が上ずる。

「嘘じゃないよ」

優しい雪都の声。しかし、彼が女性にすぐもてる事を知っている。彼女も居たのを知っている僕にはやっぱり信じられなかった。ぐつと腕に力を込め、抱き締めて来る雪都から体を遠ざける。

「・・・からかわないで下さい。雪都さん彼女とか沢山いるじゃないですか！」

僕の放った言葉に雪都の整った顔が歪む。突っぱねていた僕の腕を掴むと自分の方に引っぱり、僕の唇を奪った。口腔内をまさぐるように舌が這い、呼吸が上がる。振り払おうとするけれど、強い力で抑えられできなかった。

いい加減息が出来なくなったところ、唇が離され新鮮な空気を肺一杯に吸い込んだ。

肩で呼吸する僕に雪都は熱い視線を送る。僕の呼吸がようやく落ち着いていた頃彼が口を開いた。

「からかつてなんか、いない。確かに女には不自由してこなかったけど、お前と同居を始めてから全部切った」

ハスキーボイスが、何故だか少し震えている気がして、拒絶の言葉を飲み込む。

「・・・あの日が始めてじゃなかったんだよ。秋葵と逢うのは」
俯き加減で雪都は言う。

ん？今何か、とんでもない事を言った・・・？

今雪都は、僕に以前逢ったと言っただろうか？皆目見当がつかない。

雪都に出会ったのは確かあの日が初めてだったはずで……。

「俺と羽瑠は小学校も、中学校も一緒なんだよ」

苦笑気味で雪都は言い、そつと僕の手を握る。びっくりと体が反応するけれど、不思議と振り払うことはしなかった。

「まあ、高校に入学する年に、俺の家は崩壊して母親と一緒に母親の実家に越したけどな」

そんな告白。

「え、じゃあもしかして一緒に遊んだ……？」

僕の問いかけに雪都は頷く事で肯定した。

遠い記憶を呼び覚ます。羽瑠と何時も一緒に居た、もう1人のお兄ちゃん。背が小さく、しかし切れ長の涼やかな目元をした、やつぱりちよつとハスキーな声のお兄ちゃんが、居た気がする。

「たしか……“ゆき”って呼ばれてた……？」

確認するように雪都を見ると、やつと思いついたかと言う様に頷き、握っていた僕の手の甲にその唇を落とした。

そんな行為にどきりとする。口付けたまま僕を上目遣いに見詰め、そつして、もう僕はだめだった。昨晚理解した、雪都を好き、と言う気持ちが堰を切ったように溢れ出してきて、涙に変わり飛び出してくる。

ぼろぼろと零れ出した涙を、雪都の長い指が掬い取っていく。

そんな動作を確認しながら、じゃあなんで昨晚僕の作った夕食に手を付けなかったのか、そんな疑問が浮んで来た。留める事が出来ずに言葉がするりと飛び出してくる。

「……じゃあなんで、僕の作ったご飯、食べてくれなかったんですか？昨日はなんで遅く帰ってきたんですか？」

涙でちゃんと発音できたかは疑問だったが、言いたい事は言った。そんな僕を雪都の大きな体が抱き締める。腕の中にすっぽりと埋まりながらその安心感に、もう、どうでもいいやと思った。どんな理由でも、もういい。今、この瞬間が全てを物語っているように思った。

頭上で、ハスキーボイスがクスリと笑う。

「はいはい、泣かない」

ぽんぽんと背中を摩られ、うつとりと目を閉じた。

「・・・昨日の朝、気持ちを抑えられなくてついついお前にキスしちゃっただろ？」

苦笑まじりにそう聞かれ、頷く。

「あの後、お前大学でも俺のこと避けるし、そんなに嫌だったのか、思ったら素面ではいられなくて羽瑠の家で自棄酒してたんだよ」
羽瑠の家・・・、と言う事は、羽瑠は雪都の気持ちを知っていたって事なのだろうか？

疑問符が頭を過ぎる。確か、羽瑠が雪都に電話をかけた時、『食っちゃまっ』とかなんとか・・・。

因みに、もしかして僕の気持ちも気付いていた・・・とか？
ぞつとしない事を考えながら、雪都の顔を見た。

「で、べろんべろんになつて帰つて来たんだよ。めしには気付かなかったんだ。悲しい思いさせてごめん。でもちゃんと朝食食べたから」
素直に謝られて、しかも朝ちゃんと食べていてくれたんだと思うと、心がふわりと温かくなる。だから、僕も素直にこくと頷いた。

そんな僕に再度キスが降りてくる。気恥ずかしさに少し俯くけれど、素直に受け入れた。

「愛してる、秋葵・・・」

優しいキスの合間にハスキーボイスが囁く。

僕は其れを受け入れ小さな声で想いを打ち明けた

。

けたたましいアラームの音が、直ぐ近くで聞こえる。

まどろみの中からゆっくりと覚醒し、アラームの元を手探りで手繰り寄せた。

それが何時もと違う手触りで、いつきに覚醒する。

目を開けると直ぐ横に、切れ長の目元が特徴的な整った顔があった。驚いて体を動かすと、鈍い痛みが体中に走る。其れが何を意味するのか直ぐに悟り、1人で赤面し、再度布団をかぶった。その振動で、何時もはとつても目覚めが悪い雪都が目を開けるとろんとした目を僕に向け、その顔を笑顔で崩した。

「おはよ、秋葵ちゃん」

ハスキーボイスが甘ったるく囁く。

少し掠れたその声が昨晚の情事を思い出させ、僕は1人で熱くなった。

「お、はようございます」

妙なところでかんでしまったけれど一応挨拶を済ませると、いたたまれなくなり布団を出ようとした僕を、雪都が止める。

強い力で雪都の腕の中に収まってしまうと、居心地の良さにうっとりしてしまう。

「今日は大学はお休みしよう」

そんな甘い誘いに、ぐらりと傾きそうになるけれど、そうは言っていられないのが現実で。

「駄目ですよ、雪都さん。単位まずいんですよ？」

さぼり癖のある雪都。朝しっかり起こし、一緒に登校しても途中で消える事が多かった雪都は結構単位がやばいらしい。

「ん？・・・大丈夫、まだ平気だから」

そんな事を言いながら、雪都の手が妖しく蠢くのが解った。

手の動きがしつかりとした意思を持っているのがわかり僕はあわてる。

「ちょ、どこ触ってるんですかつ」

蠢く手を掴み抗議の声を上げるけれど、雪都は意に返さないようで手は止まってくれない。下生えを擦られ僕の方が形を変え始めると、雪都は楽しそうに笑った。

「だ、めです！」

最後の気力を振り絞り、止めにかかった僕を、しかし雪都はやっぱ

り余裕の笑顔を向け、

「ちよつとだけだから・・・」

そんな甘い囁きをし、抗えなくなってしまうた僕の唇にキスを落と
した。

おまけに続く・・・

STORY TWO（後書き）

いかがでしたでしょうか？

雪都と秋葵のラブラブ恋物語でした。

羽瑠と四季の場合にもあった様に、最後は雪都目線の物語を収録しようかと思いま

す。

最後まで、楽しんで頂けたらと思います。

春のまどろみの中で 雪都の眩き

初めてあの子を見た時、なんてかわいらしい子なんだろうと、頬が緩んだ。

小さな手足を一生懸命に動かし、先に行く俺と羽瑠に追いつこうと頑張っている姿……。

『羽瑠兄、ゆき兄!!』

と呼ばれ苦笑しながら追いつくのを待っていたのを覚えている。

家の都合で引越し、なんとなく入った大学で羽瑠と再会、そうしてあのアパートで秋葵を見つけた時、俺は恋に落ちた。

けて美人ではないけれど愛くるしい顔は、幼少の頃のまま。

まっすぐな視線を向けられ、今までのどんな女にも感じなかった感情が公になった。

ああ、俺は幼い頃からこの子に夢中だったのだと思った。

だからあの日、強引に同居を申し出たのだ。当然断られると思っていたのに秋葵は

『……しょうがないな、良いですよ』

と了承した。

朝がめっぼう弱い俺を、根気強く起こしに来る秋葵に、もうたまらない。

我慢も限界に達し、あの日とうとう寝ぼけてるのをいいことにキスしてしまったのだ。

しかし、逃げ出されて後悔した。

自分がいい加減である事をいのように使い、秋葵に甘えていたのが災いしたのか……。

秋葵の側で、まったりと出来れば良いと思っていたのに、それだけでは我慢が出来なくて、あの無垢な素肌を物にしようとしたのがいけなかったのか。

いやいや、気持ちを告げなかったのがいけなかったのだ。

でも、だって秋葵は俺の親友で悪友の羽瑠の事が好きなのだ。側にいればわかる事で。

そんな羽瑠の前に姫野、と言う男が現れた事で俺のバランスが崩れた。

秋葵の羽瑠への独占欲をいたるところで目の当たりにしてしまい、ホントにもう限界だった。

早まった行動に出してしまったのは羽瑠と姫野のせい！！

そんな自己中な考えの中、羽瑠にさんざん管を巻くと、

「早く告白すればいいだろうに・・・」

と呆れられた。

わかりきっていた言葉。

小さなプライド（そんな大層な物ではないけれど）が崩れて行く音がした。

だけど、だけれど俺なりに秋葵を大事にしてきて、そんな相手にあんな無体な事をしでかして傷つけて、今更どんな顔をすればいいのかわからなくて・・・。

逃げ出した秋葵を捕まえる事が出来なかった。

泥酔状態で秋葵がいるであろう家に帰り、リビングを見る事もなく自室に入ったのは夜中の3時を過ぎていたと思う。

まさかあんな事をしでかした俺に夕食が準備されているはずはないと思い込んでいたのだ。

何時ものようにアラームが鳴るけれど、やっぱり秋季は俺を起こしには来てくれなくて、寝付けなかった俺は、玄関が静かに閉まるのを聞いた。

そろりとベッドから降り、溜息と共にリビングに出ると机の上に五目チャーハンがあった。

どう見ても、多分俺の為の食事。

嬉しさと罪悪感に、不思議な感覚を味わいながら五目チャーハンを口にした。

翌日バイトが終わり、そろそろ帰って来る頃になっても秋葵が姿を見せなくてやきもきしていた俺の携帯が着信を告げる。

液晶を確認し羽瑠だとわかると、イライラしながら通話を押した。そんな俺の苛立ちを知ってか知らずか、羽瑠は開口一番にこんなことを言ったのだ。

『お前なにしてんの？』

いらつとし、返答する声が荒くなる。

「あ？！何が」

しかし、羽瑠は携帯の向こう側で、くすくすと笑う。

余計に苛立ちを募らせた俺が終了を告げ、通話を切ろうとした時、とんでも無い事を言ったのだ。

『秋葵ならここにいるよ。あんまり可愛いから、食っちゃおうと思うんだけど』

くつくつと笑いを含んだ声に、何かがぶち切れる音を聞いた。

携帯を投げ捨て家を飛び出し、羽瑠のマンションにたどり着く。

オートロックの煩わしさに苛立ちを更に募らせ、エレベーターに乗った。

部屋のチャイムを鳴らしても返答が無い事にあせりを感じ、手荒くノックをし扉が開いた時の羽瑠の笑顔は今でも忘れられない。

秋葵の無事を確認した時の俺の安堵は誰にもわからないだろう。

「雪都さん、痛い」

思った以上に力が入っていたのだろう。秋葵の抗議の声ではつと我に返った。

中庭の大きな桜が見ごろを迎えている。

「大丈夫ですか？怖い顔してますよ」

思い出してしまった過去にこわばってしまったのだろう顔を笑顔にする。

「ごめん、なんでもないよ」

俺の優しい声に秋葵は安堵する様に笑った。

まあ、羽瑠にはほんとにむかついたけど、今こうして秋葵を自分の物に出来、幸せな一時を満喫できているのだから、よしとするしかない。

仕返しは、後日たつぷりとする事にして、今は腕の中にいる秋葵をたつぷりと味わう事に決めた俺は、その小さな唇に自分の其れを宛がった。

E
N
D

春のまどろみの中で 雪都の眩き（後書き）

古木の下で・・・

これで完結です。

読んで下さった方、如何でしたでしょうか？

少しでも満足して頂けたら光栄です。

次の作品も覗いて頂けたら幸いです・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0134/>

古木の下で

2010年10月10日01時35分発行